2021.12.12　七里教会　　最上光宏

「マリアの賛歌」　　ルカによる福音書 1:39-56

先週は、ルカによる福音書の 1 章 26 節から 38 節までの記事を通して、「マリアの受胎告知」について学びました。ガリラヤのナザレという片田舎に住むマリアという若い女性に、突然天使が現れて、「おめでとう、恵まれた方」と挨拶をし、戸惑い恐れるマリアに、「あなたは身ごもって男の子を産む。その名をイエスと名付けなさい」と語られたのです。まだ結婚していないマリアが驚いて、「どうして、そのようなことかありえましょうか」と尋ねると、その天の使いは「聖霊があなたに降り、神の御子を宿す」と告げたのです。

これが「マリアの受胎告知」です。先週、私はこの「受胎告知」と言うべきところを、「受難告知」と言ってしまったようです。自分では「受胎告知」と言ったつもりでいましたが、あとで妻から指摘されて気付きました。イエスさまの「受難予告」という言葉があるものですから、つい「受難告知」と言ってしまったようです。お詫びして訂正いたします。「受胎告知」とは、喜びの知らせです。「受難告知」とは、辛い悲しみの知らせです。真逆のことです。

けれども、よく考えてみますと、マリアにとってこの「受胎告知」は、初めから喜びの知らせであったわけではありませんでした。ヨセフと婚約していたとしても、まだ正式に結婚したわけではありません。未婚の立場で受胎して子供を産むということは、当時のユダヤの社会では、「姦淫」とみなされ、石打ちの刑に値するようなことでした。許嫁(いいなずけ)のヨセフに、どう説明したらよいのか、はたして理解してもらえるのだろうかという心配もあったことでしょう。これから自分の人生はどうなってしまうのか、という不安もありました。この受胎告知は、まだ 14,5 歳の若い娘にとって、どれほど過酷なことであったか知れません。マリアにとって「受胎告知」は、まさに「受難告知」でもあったのです。たしかに神の御子を身ごもるということは、光栄なことかもしれませんが、それはまた、予測できない大きな不安と苦しみを伴うことでした。

このような大きな不安と苦難を伴うみ使いの「告知」(知らせ)を、マリアは「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように」と受け入れることによって、それを大きな「喜びの告知」として受け止めることが出来たのです。ここにマリアの凄さがあるのです。それはマリア自身の偉大さというより、信仰による上からの力によるものでした。

信仰は、どんな苦難にも耐える力を与えるだけではなく、苦難をも喜びに変える力

でもあります。マリアが恐れおののきながらも、この告知を受け入れ、すべてを主の御手に委ねて従うことを決意した背後には、「神に出来ないことは何一つない」(37)というみ使いの力強い励ましの言葉がありました。

「神に出来ないことは何一つない」。このことをより具体的示すために、み使いは38節で「あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六ヶ月になっている」と告げたのです。

このエリサベトという女性については、1章5節以下に詳しく記されていますが、祭司ザカリアの妻で、マリアとは遠い親戚関係にありました。すでにザカリアもエリサベトも、かなり高齢で、子どもの出産については、とうの昔にあきらめていたのです。その祭司ザカリアに、主の使いは「あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい」(15)と予告したのです。そして、そのみ使いの予告通りに、エリサベトは受胎し、妊娠六か月になっていたのです。マリアにとって、この事実は、一歩を踏み出す大きな励みになったに違いありません。「神に出来ないことは何一つない」。このことは、頭では分かっていても、具体的な例がないと、なかなか実際の力にはなりえないものです。マリアの「お言葉どおり、この身になりますように」という決断に至った背後には、そのような身近な出来事を通して、神さまのなさる御業に対する確信がもてたということではないかと思います。

マリアは、このエリサベトの懐妊のことをみ使いから聞かされると、居ても立っても居られなかったようで、急いでユダにあるザカリアの家を訪ねたのです。ザカリアは祭司ですからおそらく神殿のあるエルサレムの郊外に住んでいたことでしょう。ガリラヤのナザレの村から、エルサレムまでの道は、山道を通って、歩いて 5 日ほどもかかる道のりのようです。マリアは、それほどまでにして、エリサベトに会いたいと思ったのです。それは、お互いの身に起こったことを確認し合い、喜びを共にし、大きな御業をなされる神さまを共に賛美するためです。

今日の39節以下に、二人が互いに手を取り合って、心から喜び合っている姿が生き生きと描かれています。マリアの挨拶を受けたエリサベトは、声高らかに「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。… あなたの挨拶で胎内の子は喜んで踊りました」と語り「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は何と幸いでしょう」と語っています。このエリサベツの胎に宿った子どもは、後にイエスさまの道備えをすることになるバプテスマのヨハネです。ルカによる福音の著者は、イエスとヨハネが荒野で出会う以前に、それぞれの母親同士が共に出会い、喜びを共にしたことを美しく描いているのです。

この二人の女性は、年齢的には、親子以上にかけ離れていたかも知れません。一方は

身分の高い祭司の妻であり、一方は貧しい田舎娘です。その住む場所も環境も違えば、教養も性格も違います。しかしこの二人は、共に神に選ばれ、神の大きな御業を担うものとして召されたということにおいて、一つなのです。二人はこの一点のゆえに、共に喜び、祝福し合い、神さまを讃えているのです。

ある神学者はここに「教会」のあるべき姿が描かれていると言っています。たしかに教会は、多様な人たちの集まりであり、一人一人みんな違うけれども、神さまによって選ばれ、み言葉を通して、神の御業を担うものとされているということにおいて一つなのです。問題は、私たちがとれだけその恵みを喜び、神に感謝し、互いに祝福し合って共に歩んでいるか、ということです。教会は、そういう主にある喜びと感謝と祝福に満ちた交わりなのです。

マリアは、エリサベトと出会い、彼女から祝福を受けたことを通して、さらに深い確信と大きな喜びに満たされ、高らかに神さまを賛美したのです。それが 47 節以下のマリアの賛歌です。　マリアは、ここで高らかに神を賛美して言いました。

「わたしの魂は主をあがめ、　わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。　身分の低い、この主のはしためにも　目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人も　わたしを幸いな者と言うでしょう、　力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。…」(47-49a)

このマリアの賛歌は、先ほども讃美歌 175 番でも歌いましたが、「マグニフィカート」と呼ばれて、色々な曲で歌われ親しまれて来た詩です。「マグニフィカート」というのは、ラテン語で「あがめる」という、この賛歌の最初の言葉からとられた言葉ですが、これは「大きい」という意味から来ている言葉で、地震の大きさを表す「マグニチュード」という言葉の語源にもなっているわけです。ギリシャ語の原文では「メガルノー」という言葉ですが、これも「大きくする」という意味の言葉で、「メガフォン」とか「メガトン」という単位の語源になっているのです。つまり「主をあがめる」とは、「神さまを大きくする」ということです。

神さまは、天地宇宙のすべてのものをお造りになり支配しておられる大きな方なのですが、私たちは、その神さまのことより、自分のことばかり考えたり周囲のことのみに気をとられて、神さまのことを小さく、頭の片隅でしか考えていないことが多いのではないないでしょうか。「あなたの神は小さすぎる」と言った牧師がいましたが、私たちは、自分のことや周辺のことを大きくして、神さまを小さくしているのではないでしょうか。

マリアは、「わたしの魂は主をあがめ、…」とまず神を大きくあがめ、讃えるのです。神をあがめ、「神を大きくする」ということは、「自分を小さくする」ことに他なりませ

ん。マリアは、自分を「身分の低い、主のはしため」と小さくすることによって、神を大きな方として讃えているのです。マリアの喜びと感動は、高きにいます大いなる神が、低きに居る自分のような者に目を留め、「偉大なことをなしてくださった」ことにありました。マリアは、そのように神に用いられ、御子をこの世に遣わす器として用いられることに、心から喜びと感謝をもって、「今から後、いつの世の人も、わたしを幸いな者というでしょう」(48b)と詠うのです。マリアは、み使いが最初に語った「おめでとう、恵まれた方」と言われた意味をここでしみじみと「ほんとうにそうだ」と味わっているのです。

しかしマリアは、そのような自分に対する神さまの憐れみと恵みをただ喜び、感謝しているだけではありませんでした。このマリアの賛歌の後半は、自分に対する神さまの憐れみと恵みは、この世の貧しい者や虐げられている者すべての民に与えられるものだと詠われるのです。　50 節以下をご覧ください。

「その憐れみは代々に限りなく、主を畏れる者に及びます。主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き下ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます」。

ここでマリアは、自分の上に振るわれた主の大きな力は、この世にも振るわれ、「思い上がる者を打ち散らし、権力の座にある者をその座から引き下ろし、身分の低い者は高くされ、飢えた者と富める者の格差がなくなると詠っているのです。これは神の国、神の支配の到来を詠った歌です。神さまの前に身分の違いや貧富の差はないのです。力ある者が、弱い者を虐げたり、富める者が貧しい者から搾取するようなことがあってはならないのです。

まだあどけない田舎の娘のマリアが、このような革命的な歌を歌ったということは驚くべきことです。彼女なりに貧しさの中で、権力者の横暴ぶりに心を痛め、富や力のある者が弱く貧しい者を虐げている世の矛盾を嘆いていたのかもしれません。ともかくマリアは、自分のような、とるに足りない小さな者を用いて、大きな御業をなさる神は、必ずやこの世の矛盾を解決し、小さき者、弱く貧しい者の苦しみを取り除いてくださることを確信し、主を賛美したのです。　やがてこのマリアから、神の御子イエス・キリストがお生まれになったのですが、まさにイエス・キリストは、全世界の全ての民を救うためにこの世にこられたのです。貧しき者の友として、悩み苦しむ者の苦しみを負い、人々の罪を背負って十字架の道を歩むために来られたのです。

来週はクリスマスです。この世を救うために来られた主の恵みを、一人でも多くの人々と分かち合い、共に喜び、主を賛美したいと願います。　　アーメン